

レイアード・ハミルトンという男

常人のサーファーが思いもしないスタイルで、前人未到のモンスターウェーブと対峙してきたレイアード・ハミルトン。サーフィンの次元を高めてきた男の足跡を振り返る。

文=岡崎友子 Text: Tomoko Okazaki
写真=エリック・イェダー Photo: Erik Aeder

レイアード・ハミルトンは、1964年3月2日カリフォルニア・サンフランシスコでサーファーの両親のもとに生まれた。レイアードという名前はスコットランドの言葉で、ロード（君主）という意味だ。後にサーフィンの世界に大きな足跡を残すことを予言したかのような名前だ。

父親はレイアードが2歳の時に家族のもとを離れ、母親ジョアンは息子を連れてハワイ・オアフ島に渡った。レイアードはノースショアの自宅前の海でサーファーのビリー・ハミルトンと知り合った。当時サーフボードをシェイプしながらスタイリッシュに波乗りをしていたビリーと4歳だったレイアードは、何となく気が合った。レイアードはビリーを母親に紹介しようとして家に連れて行った。それがきっかけでビリーはジョアンと結婚し、その後、家族はカウアイ島に引っ越す。

オアフと違ってまだまだ“ハワイ”が色濃いカウアイの小学校では、白人はレイアード一人だけだった。アウトサイダーであり、いじめられたが、負けずに立ち向かっていくことで、子供ながらタフで知られるようになっ

と、試行錯誤を繰り返した。

ゾディアック（ゴムボート）で引っ張って大きな波に乗ることを思いつき、オアフ島のバックヤーズでトライしたことがきっかけで、今まで乗れなかったようなビッグウェーブに挑戦するようになった。ゾディアックが水上バイクへ、そしてリスクを減らすために仲間同士でレスキューのトレーニングを積み、今のビッグウェーブサーフィンのスタンダードとなった「トウイン・サーフィン」を確立した。このトウインによって、それをまでパドリングでは不可能だった大波にも乗れるようになった。そして、古くから地元サーファー達には知られてはいたが、誰も乗ることができなかったマウイのビッグウェーブ「ジョーズ」に、仲間とともにアタックを始めた。それがメディアなどで知られるようになり、大波に挑むサーファーが急増した。だが、レイアードは別格だった。モンスターウェーブを相手に、さらにラディカルなサーフィンをブッシュしていった。そしてトウインサーフィンと同じように海の上でいろんなアイデアを追求していった。カイトサーフィン、スタンドアップパドルサーフィンなど多くの新し

た。そして強さを証明するかのように、周囲をアッと驚かせるようなクリフジャンプやヘビーな波へのアタックをやってみせていた。

16歳で高校をドロップアウト。モデルの仕事をするために、カリフォルニアに引っ越した。プロを目指すには十分なサーフィンスキルはあったが、コンペティションには目を向けなかった。カリフォルニアに滞在中に始めたウインドサーフィンでは、仲間誘われスピードトライアルに出場して何とワールドレコードを記録。一躍名前が知られスポンサーがつくようになり、“風の鳥”マウイに引っ越した。マウイではウインドサーフィンをしながらスピードトライアルで活躍し、冬にはオアフ島ノースショアのバックドアなどでサーフィンをした。この時期にマリンスポーツへの進出を企んでいたいたナイキに抜擢され、スポンサーされた。

80年代後半は『ノース・ショア』というハリウッドムービーでヒーロー役で出演したり、モデル業も続けてはいた。だが、このころから新しいスタイルを追求し始める。エアリアル360をメイクするために面ファスナーでブーツとデッキパッドを作ってみたり、ストラップをつけてみたり

いスポーツの立役者となった。

その一つにハイドロfoilサーフィンがあった。ハイドロfoil（水中翼）により、水面下のエネルギーを使って空中を滑走するという斬新なアイデアだ。レイアードは20年ほどトライしギアの性能を高めてきた。結果、この数年で新しく気軽にできるfoilが広まるようになった。そして、レイアードは、数年前にカウアイ島のキングズリーフ（ジョーズよりも大きな波が割れると言われているが、なかなかブレイクしない深いリーフ）で、記録的なビッグウェーブをfoilでメイクした。

現在は元プロビーチバレーの選手でトップモデルであった妻キャビー・リース、そして3人の娘とともに冬はカウアイ、夏はマリブで生活している。トレーニングにも熱心で、プロアスリート達と特別なプログラムを開発したり、体にいい食物をプロデュースしたりとヘルスとウェルネス、そしてサーフィンを融合したアプローチを発信している。

54歳になった現在も、サーフィンの未知なる領域にチャレンジをし続け、さらなる高い次元に足を踏み入れようとしている。⑨